

飛鳥寺塔心礎出土蛇行状鉄器の復元的研究

1 はじめに

飛鳥資料館では飛鳥寺塔心礎出土品の再整理の一環として、蛇行状鉄器の本来の形状を推定復元した。本稿はその復元に関する考察について記す。作業は石橋と、調査研究アシスタント（当時）の木村が主としておこない、諫早直人（都城発掘調査部研究員・当時）の協力を得た。

蛇行状鉄器は、奈文研による1957年の飛鳥寺跡第3次調査において、基壇中心部の現地地表下2.7mに位置する心礎上面西南隅で検出した¹⁾。推古天皇元年（593）の埋納品と考えられ、出土状況から周辺の金銅製打出金具などとともに、原位置を保っていたとみられる。しかし蛇行状鉄器は立体的な形を保っておらず、心礎上面に崩れ落ちたような状況だった。したがって、むき出しの蛇行状鉄器の周囲を土で充填した状況ではなく、蛇行状鉄器周辺には多少の空間があり、それが腐朽か土圧によって崩れ落ち、本体の一部も腐食して消滅したと推測される。袋部外面には織物痕跡がある点も注意される。

蛇行状鉄器の形状については報告書に簡単な記載があるほか、近年、諫早による図化と報告がなされた²⁾が、蛇行状部分の復元には課題が残されていた。（石橋茂登）

2 飛鳥寺塔心礎出土蛇行状鉄器

飛鳥寺塔心礎出土の蛇行状鉄器は「U字形部材」と「蛇行状部材」から成る（図66左・中央）。現在、それらは大きく3点の破片に分かれている。U字形部材（3）は正面から見て右端の欠損を除いてほぼ完形である一方で、蛇行状部材は上部（1）・下部（2）とU字形部材に差し込まれた部分の3つのパーツに分離している。残存する蛇行状部材には4カ所の屈曲が確認されるが、本来少なくとも6カ所の屈曲があったと考えられる²⁾。失われた2カ所の屈曲は、蛇行状部材の上部と下部の間、蛇行状部材の下部とU字形部材の間にそれぞれ少なくとも1カ所ずつの屈曲があったことが想定される。

よって、今回の復元作業では飛鳥寺塔心礎出土蛇行状鉄器の本来の形状を復元することを目的とし、上記2カ所の屈曲がいかなる形状であったのかを検討した。

3 復元方法

蛇行状部材の上部と下部の間（①の屈曲）、蛇行状部材の下部とU字形部材の間（②の屈曲）を、以下の方法で推定復元した（図66）。

類例からの推定 蛇行状鉄器は、日本列島では8遺跡、朝鮮半島では16遺跡からの出土が知られ、資料によって屈曲数が1～8カ所という違いがみられる²⁾。その中

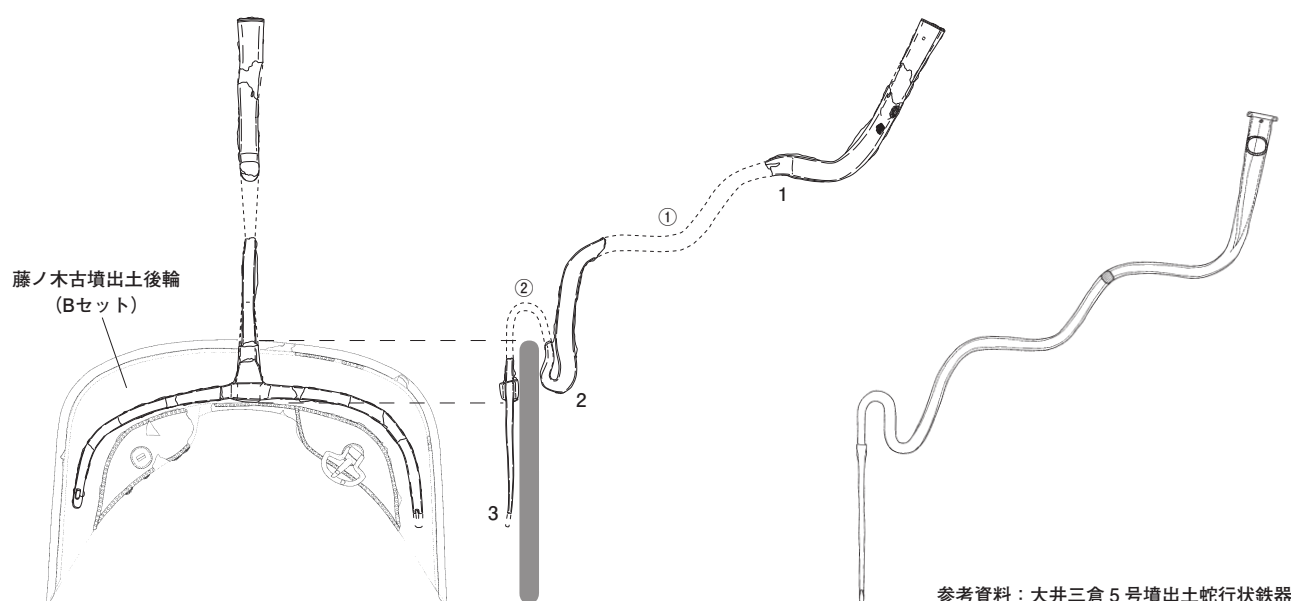


図66 飛鳥寺塔心礎出土蛇行状鉄器 形状復元 1：10（古墳出土例は註3・7より転載）

で、今回は屈曲数が飛鳥寺例同様に6ヵ所であり、資料としてもっとも良好な状態にある福岡県大井三倉5号墳例³⁾をモデルとし、蛇行状部材の上部と下部に残存する屈曲と齟齬が生じないように、図上で調整して①の屈曲を復元した。

後輪への装着 ②の屈曲については、大井三倉5号墳例の実測図にあわせて蛇行状部材の下部とU字形部材の位置を決めようとしたが、決め手となる蛇行状部材の下部の角度が定まらなかったため、後輪への装着を想定した計算から導き出すことにした⁴⁾。

蛇行状鉄器は、U字形部材が鞍の居木の湾曲に沿って設置され、蛇行状部材下端の最初の屈曲、つまり②の屈曲部分で後輪を挟み込み固定されたものと考えられる⁵⁾。この装着方法にもとづくと、居木の頂点から鞍橋の頂点までの高さ、また鞍橋の厚みを求めることによって、②の屈曲がどの程度であったのかが求められることになる。ただし、飛鳥寺では鞍は出土しておらず、また居木と鞍橋の両方を備えた同時代の鞍は未発見である。そのため、古墳出土の覆輪をともなう鉄地金銅装の鞍から推定することとした。磯金具・覆輪によって、居木上面の高さ⁶⁾、鞍橋の高さ・鞍橋の厚みがある程度推測できるためである。蛇行状鉄器出土古墳からの好例が見当たらなかったため、飛鳥寺塔心礎舍利埋納儀礼(593年)と時期が近いTK43型式期の奈良県藤ノ木古墳の鉄地金銅装鞍(Bセット)⁷⁾から数値を割り出すこととした。藤ノ木古墳出土後輪(Bセット)は、磯金具の頂点と覆輪の頂点の間が8.3cmを測り、覆輪の厚さは2.6cmであった。この法量に基づき、高さに少し余裕をもたせ⁸⁾、先に復元した①の屈曲とのバランスをみながら、②の屈曲を復元した。真横から見た場合、復元した飛鳥寺例の法量は全長58.5cm、高さ67.0cmとなる。

以上により飛鳥寺塔心礎出土蛇行状鉄器の形状・使用方法は図67のような姿であったことが想定される。

(木村結香／奈良県立橿原考古学研究所)

4 おわりに

飛鳥資料館では上記の復元をもとに、蛇行状鉄器のレプリカを作成した。復元案には別の可能性もあろうが、これによって本来の形状を分かりやすく展示することが可能となった。これまで漠然とイメージされていた蛇行

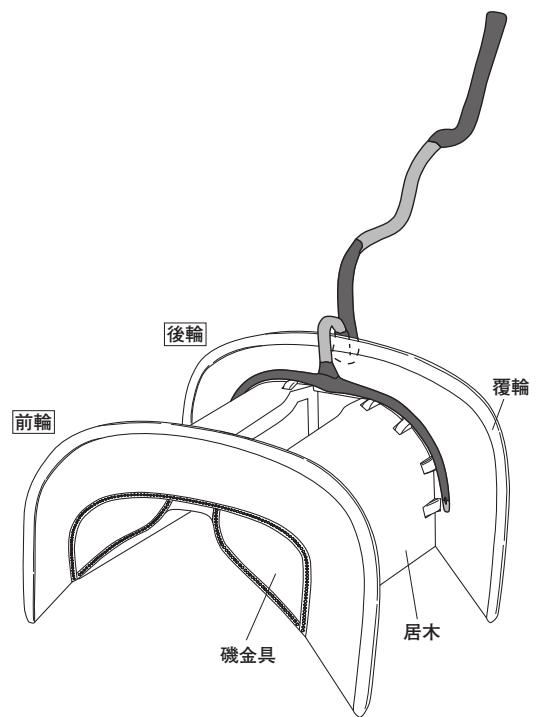


図67 飛鳥寺塔心礎出土蛇行状鉄器 使用想定
(濃いトーンが現存箇所、薄いトーンが復元箇所)

状鉄器の形状を具体的に復元する過程で、形状だけでなく装着方法やセット関係、埋納品の構成などについて、あらためて考えさせられる点も多かった。なお今回、飛鳥寺塔心礎出土の馬鈴のレプリカも作成した。今後は他の遺物についても復元的研究をすすめたい。

本稿にはJSPS科研費JP15K03002の成果を含む。

(石橋・木村)

註

- 1) 『飛鳥寺報告』1958。
- 2) 諫早直人「飛鳥寺塔心礎出土馬具」『紀要 2015』。
- 3) 酒井仁夫『宗像大井三倉遺跡』宗像市教育委員会、1987。
- 4) 蛇行状鉄器を馬に装着する「寄生」とする見解に立ち、かつ後輪垂直型鞍に装着された前提で考えた。
- 5) 白井克也「梁山夫婦塚における土器祭祀の復元」『東京国立博物館紀要』42、2007。
- 6) 居木上面から一段下がったところに鞍橋を設置するための段差が設けられるため、居木上面と磯金具上面は厳密には一致しない(松尾充晶「馬具」『上塩冶築山古墳の研究』鳥根県古代文化センター、1999)。ただし、古墳時代居木の唯一の出土資料である福岡県元岡・桑原遺跡群例から判断するに、この段差は1cm程度のものと考えられる(吉留秀敏『元岡・桑原遺跡群』16、福岡市教育委員会、2010)。
- 7) 勝部明生ほか『斑鳩藤ノ木古墳 第一次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所、1990。
- 8) 梁山夫婦塚の蛇行状鉄器の装着復元をおこなった白井2007にも「後輪の覆輪のやや上方を通過して」という記述がある。